

異世界マンガ作画大賞 課題作品5（男子向け）

◆概要

私はリリー。Sランクパーティ「赤い連撃」の回復師をしている。

リーダーは、長剣使いのハヤト。彼の放つ連撃について行ける者は居ない。

攻撃魔術の使い手のスノウ。彼女は一度にたくさんの氷の刃を展開し、敵を殲滅する。

弓使いのフォリン。美しいエルフであり、その弓の速さと正確さは神業だ。

そして、昨日新しく聖女のアスカさんが加わった。

嫌な予感は当たって、私は次の日のダンジョン攻略の最中に、石橋から突き落とされ奈落へと続く穴に落ちた。

そんな時、女剣士のエルミーナのパーティーと、ポーターのデイジーのパーティーも同じく追放劇が繰り広げられていた。そして同じように奈落に落とされる。

奈落で出会った三人は、リリーの回復魔法で回復し、一緒にダンジョンを出ることになったのだった。

ところで、奈落で頭を打ったせいか、

【貴女はキャリアアップのギフトを手に入れました】って頭の中に響いたんだけど、コレって何!? リリーは頭を打った衝撃で、ひとつのジョブを極めると、別のジョブも選べるようになったのだ! 末は聖女か大賢者か!?

◆キャラクター設定

○リリー

女性、人間、職業「回復師」、ギフト「キャリアアップ」

特徴：パーティーを追放されて、石橋から奈落に突き落とされた。

回復師の白いローブを着ている。杖を使う派では無いので杖は持っていない。淡いピンクブルンドの長い髪をお下げにしている、瞳は髪よりは濃いローズクォーツ色。

○エルミーナ

女性、人間、職業「剣士」

特徴：パーティーを追放されて、石橋から奈落に突き落とされた。

漆黒の真っ直ぐ伸びた長髪に、紫の瞳。良質のレザーっぽい防具で身を包んでいる。細身で鍛えられたその身体は女性らしいラインを描いて、俗に言う美人。

○デイジー

女性、ドワーフのハーフ、職業「重戦士」

特徴：パーティーを追放されて、石橋から奈落に突き落とされた。

力は一級品だが、小柄ゆえに元パーティーでの役職は荷物持ち〈ポーター〉。ポニーテールにした金髪と緑の瞳がキレイな、少女のように幼く見える容姿。ポーターをしていたせいか、革鎧と割と軽装備なのに大きなハルバードを持っているのがミスマッチ。

◆課題小説（一部シーンを抜粋して、4～8P程度の完成原稿を仕上げてください）

私はリリー。Sランクパーティ「赤い連撃」の回復師をしている。支援魔法も少しできたりする。でも私自身はBランクだ。

リーダーは、長剣使いのハヤト。彼の放つ連撃について行ける者は居ない。攻撃魔術の使い手のスノウ。彼女は一度にたくさんの氷の刃を展開し、敵を殲滅する。弓使いのフォリン。美しいエルフであり、その弓の速さと正確さは神業だ。そして、昨日新しく聖女のアスカさんが加わった。

なんかね。『回復役重複してない？』とは、ちらっと思ったんだ。それに、なんかみんな私抜きでコソコソ話してること多いなあって。

そして、その日のダンジョン探索は、やっぱりなんかギクシャクしてた。誰もおしゃべりしないし。

私が回復しようとする、アスカさんが対抗するかのよう先にヒールをかけてくる。先に打つのが目的になっているから魔力練れてなくて、完全に回復できていないじゃない。

そして、下は『奈落』まで続くと言われている石橋にたどり着いた時だった。

「リリー、お前はもう要らない」

私を指さし告げるハヤト。

「急に、どうして……！」

悪い予感当たったが、まさか攻略中にこんなことを言われるなんて。混乱する私をあざけるかのようにハヤトが言う。

「聖女さまが入ってくれたんだ、その下位互換の回復師なんて、もういらないんだよ！今日一緒にいてわかっただろう。魔法の発現速度も彼女の方が早い！お前の負けだ！」

ゆっくり起きたかったが、はっと気を取り直す。

「ここ、奈落だ」

慌てて辺りを見渡し、敵が居ないか確認する。だが幸いこの部屋には魔物は居なかった。

中央を大きな柱で支える円形の白い部屋。そしてひとつ扉がある。

『奈落』と言うには不思議な不思議な部屋だった。

「誰かいるのか？」

澄んだ女性の声がした。

『柱の影？』

恐る恐る柱の反対側に回ると、一人の女性が倒れていた。

漆黒の真っ直ぐ伸びた長髪に、紫の瞳。良質のレザーっぽい防具で身を包んだ、細身で鍛えられたその身体は女性らしいラインを描いている。女の私から見てもキレイだよ。

「ぼーっとしていないで、出来たら中級ポーションか回復魔法をかけて貰えないだろうか」

うん、容姿に見とれてぼーっとしちゃったけど、この人の腕は変な方向に曲がってるし、あちこち血だらけだ。

「ごっゴメンなさい！今回復します！」

彼女に両方の手のひらを向けて、唱える。

「クリーン」「ハイヒール」

すると、彼女の体は光に包まれ体が綺麗に癒えていく。

「ありがとう、私はエルミーナ。剣士をしている」

「私はリリー、回復師をしています」

互いに自己紹介する。

「私は、パーティを追放されて、石橋から突き落とされたんだが、君は？」

「……私も同じです。聖女がパーティにいるから、下級職の私はもういないって、落とされました」

「パーティメンバーの強制追放が流行っているとは聞いたが、これはひどいな」

「あ、あのっ」

なぜかわしげに語る彼女の言葉を、私は制止する。

「どうした？」

「あの時、確か『ポーターなんかいない!』って似たような別の騒ぎがあって……」

エルミーナが立ち上がる。

「この部屋に居ないということは、部屋の外に落ちたか。助けに行こうと思うが、支援をお願いできないか？」

奈落のモンスターなんてどれだけ強いんだろう。はっきり言ってすごく怖い。でも、助けなきやって思った。

「うん、行こう！」

「あ、ちょっと待って」

エルミーナが扉を開けようとする前に、彼女を止める。

「バフかけさせて」

そう言って、かけられるバフ全てを彼女にかける。

パワーアップ スピードアップ アタックエンフォース
「筋力増加」「速度増加」「攻撃強化」。

マジックエンフォース
そして私に「魔法強化」。

「え？ちょっとあなた回復師でしょ？」

「だって元のPTアタッカーばかりで、支援できる人いなくて。だから私が覚えました！さあ、行きましょう！」

エルミーナは思った。

『リリーを追放したPTは今後同じ威力を発揮できるのだろうか』と。

なぜなら、剣を握る感触だけでわかるのだ。彼女のバフで自分の力が数段上がったことが。

エルミーナが慎重に扉を開ける。

「居た。小さな女の子がいる。」

「……でも側にミノタウロスが一匹いるな……私が引き付けているうちに、彼女を回復してくれ。行くぞ！」

エルミーナが剣を抜き、扉を開ける。

「お前の相手は私だ！！」

気を引きつけるための剣戟を腹に一閃入れる。いい感触だ。深深と脂肪が見えるくらいには剣が入っている。

「ブモオオオオオオ！」

ミノタウロスが痛みと怒りの声をあげてエルミーナの方に体を向けた。成功だ。倒れている少女への道ができた！

私は、ミノタウロスが気づかないようにそっと少女に近づくと、「クリーン」「ハイヒール」と唱えた。少女が目を覚ます。

「あれ、アタシ……」

「ここは奈落。落とされたのよ。今、彼女が魔物の気を引いてくれてる。」

そう言って、ミノタウロスと戦うエルミーナを指さす。

「っと、状況は掴めたわ。回復アリガト。まったくあいつらポーター扱いばかりしやがって」
そう言うと、少女は袋から、その袋に似つかわしくないサイズのハルバードを取り出した。
「支援ヨロシク。行くぜー！」

身の丈ほどのハルバードを肩に軽々担いで、少女はミノタウロスに向かって行った。

まずは、今まで一人で耐えてくれてたエルミーナね。

右手で「ハイヒール」。

その間にあの子のバフもいれないと……。

パワーアップ スピードアップ アタックエンフォース
左手で「筋力増加」「速度増加」「攻撃強化」。

「うわっすごい動ける！」

少女がびよんと飛び上がると、ミノタウロスの脳天にハルバードをぶち当てる。切り裂くことはないが、脳震盪を起こしたのか、頭を押さえてフラフラしている。

「よし、いいぞ！動けなくなってる！」

エルミーナの目が勝利を確信したものになる。

「交互に首を狙うぞ！」

そう言ってエルミーナが首の左半分を切り。少女が反対側から勢いよくハルバードを首に向けて打ち付ける。

ずるり、とミノタウロスの首がずれ、首が落ち、体が倒れた。

無事ミノタウロスを倒すと、

「取り敢えずコレ、アイテムボックスにしまっとくね！」

そう言うと、少女はやっぱりサイズにあっていない袋の中に、ミノタウロスと魔物の持つ

ていた武器をしまった。やっぱりアイテムボックスってあのアイテムボックスなのだろうか？

そんなことを考えていたら、頭の中に『アレ』が響いた。

【回復師のレベルが上限に達しました。以下の職業を追加で選べます】

- ・ 聖女
- ・ 魔術師

「一旦、安全な部屋に戻ろう」

エルミーナに言われて、みんなで例の安全な白い部屋に戻った。

「ひとまず、これで落とされた者は全員揃ったかな」

エルミーナが見回し、私たちが頷く。

「自己紹介をしよう。私はエルミーナ。エルと呼んで欲しい。剣士をしていて、【鑑定】のギフト持ちだ。パーティーを追放されて、石橋から奈落に突き落とされた」

説明が重複するかもしれないが、エルは漆黒の真っ直ぐ伸びた長髪に、紫の瞳。良質のレザーっぽい防具で身を包んだ、細身で鍛えられたその身体は女性らしいラインを描いている。ハッキリ言おう。美人だ。

「アタシはデイジー。アイテムボックスのギフト持ちだ。ドワーフのハーフだからこんなナリだけど、力は一級品だよ。戦えるって言うのにポーターさせといて、チビなポーターは要らないって言われて奈落に落とされた」

デイジーは、少女と見まごう幼げに見える子だ。ポニーテールにした金髪と緑の瞳がキレイだよ。正直小さい子が趣味ってとかいう部類の男性だったら放って置かないんじゃないかな。

ポーターをしていたせいか、革鎧と割と軽装備なのに大きなハルバードを持っているのが、ミスマッチな感じ。

「私はリリー。回復師でちょっと支援魔法が使えます。聖女がPTに加入したのでもう要らないって言われて、奈落に落とされました。【キャリアアップ】ってギフトを持っているみたいです……」

私は回復師の白いローブを着ている。杖を使う派では無いので杖は持っていない。淡いピ

シクブロンドの長い髪をお下げにしている、瞳は髪よりは濃いローズクォーツ色だ。人並み……だと思う。

というか、二人とも揃って、「「キャリアアップ？」」に食いついた。そりゃそうだよね。私だって意味わかんないもん。

「私の【鑑定】でちょっと見せてもらっていいかな？」

エルが尋ねるのに了承の意味を込めて頷く。

「本当だね。しかも次のジョブを選べる状態になってる。それにしても、リリーの総魔力量は凄いな」

エルの鑑定能力は凄いみたい。そんなことまで分かっちゃうんだ。

「今、聖女か魔術師を追加で選べるらしくて。これから皆さんと一緒に地上を目指すなら、相談した方がいいかなあって思って保留中です」

私は悩ましげに首を傾げる。

「私とエルって純粋なアタッカーでしょ。物理攻撃が効かない敵がいるとお手上げなんだよね。魔術師はどうかかな？」

デイジーが提案する。

「確かにそうかもね。聖女だと、聖属性攻撃に偏るし。回復に関しては、リリーの魔法の威力は高いから、今で十分だしね。その魔力総量なら回復師と魔術師の両立も可能なんじゃないかな」

「じゃあ、魔術師選びますね！」

【回復師のレベルが上限に達しました。以下の職業を追加で選べます】

・聖女

→魔術師

みんなの意見を聞いて、私は回復師兼魔術師になった！

……それにしても、私ってそんなに総魔力量多かったのかぁ。